

潮来市の誇れる文化

第137回

島崎落城物語

島崎殿 徳一丸さまご最期

むかし、むかし、島崎の丘の上に、立派なお城がありました。殿さまは代々島崎左衛門尉と申しまして、四百年も続いた豪族でございました。

その頃永らく続いた戦国の世も、織田信長が亡び豊臣秀吉が天下を取り申して、戦乱の世ももう終わりに近づいた頃のことでございます。その時の殿さまの左衛門尉安定さまのところへ、太田の城中に立派な茶室が出来上がったので、茶会を催したいからぜひ出席してほしいとの文面が届きました。佐竹の殿さまは常陸の国の大名で、島崎の殿さまもその下について度々の戦に参加して手柄を立てておりました。豊臣秀吉の小田原攻略には佐竹の命に従ってはおる相州小田原まで出陣致しました。この度の太田への招待はそのためのご褒美と思われたのも当然のことかも知れません。殿さまは長男の徳一丸さまに、やがては十八代目の島崎の殿さまになっても恥ずかしくないよう行儀作法を身に付けさせ、二人ともご立派なお仕度で島崎のお城を御出立になったそうです。

話題は変わりますが、殿さまの奥方はお里の方と申され、久慈郡上小川の城主、小川大和守さまの姫でございました。これまでのように戦に明け暮れる戦国の世では、親子ともに奥方さまの里に参る余裕などあるわけもございません。しかしこの度の太田行きは出陣するわけではないので、これを機会に徳一丸さまをひき連れ、お祖父さんの大和守さまにお会わせになって、立派に成長したお姿をお見せしようとお考えになったのです。

しかし、佐竹の殿さまは恐ろしい計略を用意していました。先の小田原攻めの時、秀吉に謁見した佐竹の殿さまは、秀吉からこれまでの手柄が認められ、常陸の国全域を受領して、どのように処分してもよろしいという約束がひそかに結ばれておりました。佐竹の殿さまはこれを幸いと行方・鹿島の城主たちを太田に呼び出し、有無を言わず殺してしまわれたのです。

小川大和守さまには、佐竹の殿さまから島崎父子を捉えて殺すよう敵命がありました。大和守さまは、主君の命とはいえ、わが婿、わが孫を館に入れて殺すことはできず、やむをえず涙を吞んで部下に命じ、島崎父子を知らぬ間に鉄砲で討たせたこととございませぬ。

島崎の殿さまは五十一歳の働き盛り、徳一丸さまはわずか十三歳の蕾も未だ開かぬまま無念の最期を上げられたのでございます。

潮来市文化財保護審議会

委員 前島 英夫



御札神社

潮来市の誇れる自然

第76回

冬の味覚 ヤマトシジミ

寒がり、寒だら、寒びらめ、寒びな・いづれも寒くなるにつれて脂肪をたくわえ身がしまつて美味しくなる魚の名に「寒」の字をつけたものです。魚以外では、「寒しじみ」が思い浮かびます。日本三大しじみ産地の酒沼(ひぬま)の「寒しじみ」も、茨城県の冬の味覚です。しじみの旬は年に2度。12〜2月頃の「寒しじみ」と6〜8月頃の「土用しじみ」があります。寒しじみは越冬のために栄養をたくわえて土中に潜っているもの、土用しじみは繁殖を前にして身を太らせているものです。

日本産しじみ類3種のうち、私たちが「しじみ」としてよく食べているのは「ヤマトシジミ」です。純淡水域に生息するマシジミやセタシジミと異なり、ヤマトシジミは酒沼のように淡水と海水がまじりあう汽水で育ちます。かつて汽水域であった霞ヶ浦にもヤマトシジミが生息していました。

縄文時代の貝塚群の発掘に関する報告書からは、当時の霞ヶ浦に多種多様な海産貝類とともにヤマトシジミが生息していたことが読み取れます。江戸期以降には上流からの土砂の堆積によって湖の出口がふさがり淡水化が進みました。1940年代、治水のために土砂を取り除く工事が進むと再び海水が入って汽水化し、1950〜1970年代には霞ヶ浦のヤマトシジミ漁獲量は多い年で3000トン超を記録しました。しかし1974年に霞ヶ浦の下流側の水門が完全に閉鎖されて淡水湖になると、ヤマトシジミが激減し、採貝漁業もできなくなりしました。それから半世紀近くを経て、霞ヶ浦産ヤマトシジミを食した記憶は貴重なものとなりつつあります。しかし、道の駅などでお土産として売られているしじみの佃煮から、その名残を感じることができるようです。

東邦大学東京湾生態系研究センター

中山 聖子
茨城大学水圏環境フィールドステーション
加納 光樹



酒沼産ヤマトシジミ



しじみのつくだ煮



寒しじみの味噌汁